

911.3

7

付
合
記

付金小鏡



正月 十一 二月 十九 三月 廿五

五月 廿九 六月 三十 七月 四 八月 廿

九月 廿九 十月 十六 十一月 七 十二月 廿六

悉 七十九 休懷 九十六 秋夜 百三 神祇 百六

旅 百十 山類 百五 水边 百廿 居所 百三

植物 百九 生類 百九 雜 百五十八

○四月之詞

一 春立 二 星 三 唱 三 菜子 四 膠赤 五 水 樣

六 水 七 試 八 子 日 九 白馬 十 菜

十一 井 十二 梅 十三 縣 十四 雲 十五 賭

十六 殘 十七 餘 十八 考 十九 家 二十 保 嬌

廿一 野 廿二 下 崩 廿三 長 廿四 水 解

廿五 東 廿六 凡 廿七 春 雨 廿八 朝 舊 廿九 雄 子

三十 春 月 三十一 角 心 芦

○二月之詞

三十一 柳 三十二 木公 三十三 草 三十四 畑焼 三十五 草

三十六 春駒 三十七 かき田 三十八 春余 三十九 大原余 四十 佛の別

四十一 屏ノ 四十二 燕 四十三 胡蝶 四十四 松のふり

四十五 梨花 四十六 花 四十七 桜

○三月

四十八 桃 四十九 曲の裏 五十 便の裏 五十一 水月 五十二 上南の

五十三 蛙 五十四 幸の點 五十五 苗代 五十六 茨 五十七 堂

五十八 多帰 五十九 雲雀 六十 春對 六十一 空 六十二 空 六十三 藤

六十四 歎冬 六十五 暮春

○四月

六十六 更衣 六十七 卯花 六十八 杜の 六十九 牡丹 七十 子規

七十一 新樹 七十二 神祭 七十三 葵 七十四 夜草

○五月

七十二 苺蒲 七十三 菜玉 七十四 心杯 七十五 心杯 七十六 五月雨

七十七 楊麻 七十八 ちちの 七十九 早苗 八十 麦 八十一 櫻

子橋 主鮎 生橋舟 主面 主面
主真氣 主麻子 主一 主一 主一
主蚊 主世 主短夜 主香月

○六月

主水 主魚 主子 主蓮 主瓜
主白雨 主八 主雲 主雨 主情
主暑日 主涼 主近 主援

○七月

一 立秋 二 蠅 三 夏 四 伏暑 五 心
六 夏 七 樹 八 桐 九 柳 十 角
十一 主 十二 落 十三 芳 十四 月 十五 子
十六 秋 十七 傳 十八 秋 十九 郎 二十 豈
二十一 花 二十二 朝 二十三 稍 二十四 早 二十五 田 二十六 虫
二十七 麻 二十八 小 二十九 一

○八月

天 稍 葉 主 恩 草 主 金 草 主 芭 蕉 主 司 石

主放生 馬駒迹 夏初溫 栗初光 野介

王
 長夜
 黑
 崩築
 王
 滅鮎

罌粟
罌粟
罌粟
罌粟
罌粟
罌粟
罌粟

推
十九
 入
十八
 六
十七
 友
十六
 去
十五
 去
十四
 去
十三
 去
十二
 去
十一
 去
十
 去
九
 去
八
 去
七
 去
六
 去
五
 去
四
 去
三
 去
二
 去
一
 去

○十月

一 分奴 二 霜 三 木葉 四 冬令霜土 枯雪

六
千
七
八
九
十
本
帖

十
炭電士
綱代士
齋持士
亥月

○土月

孟水 五 紫 債 去 去 止 夷 六 亥

九
小
宗
子
月
二
二
金

○十二月

王 神樂 甘煉 うむ物 王 理火 苗冬梅
 王 内王 王 佛名 王 荷那 王 進健 王 主山

○戀部

一 恋 二 思 三 逢 四 待 五 恨
 六 契 七 契 八 契 九 契 十 別
 十一 土 十二 土 十三 土 十四 土 十五 土
 十六 土 十七 土 十八 土 十九 土 二十 土
 二十一 土 二十二 土 二十三 土 二十四 土 二十五 土
 二十六 土 二十七 土 二十八 土 二十九 土 三十 土

其 色好 其 油 其 油 其 油 其 油
 其 占方 其 占方 其 占方 其 占方 其 占方
 其 近 其 近 其 近 其 近 其 近
 其 七 其 七 其 七 其 七 其 七
 其 二 其 二 其 二 其 二 其 二
 其 七 其 七 其 七 其 七 其 七
 其 一 其 一 其 一 其 一 其 一

○述懐

一世と捨家ニひり 三老付齡四 臣家九 毒衣

云墨保の袖 七 藤衣八 安人九 死も今

十 古塚 土 草原 土 本のかの末 土 くらゐも本

古親 五 なの親 六 子と云ふ七 格り

○釋教

大寺 九 室 二 法 三 行 三 悟

五 阿加六 廿 其曉 五 夜の玉 六 佛 七 三 龜

天 八 乃の古ハむし人

○神祇

一 神 二 文 三 秋 四 瑞籬 五 白虫

付な六 注連 七 祝子 九 かく

○旅之部

十 旅 土 都といふ人 土 金り 十三 関

古 船 五 駒 十六 驛路 十七 杭八 越家 出落

十 節と金 十二 ちとてうへる家

○山類

一山 二峯 三岡 四谷 五麓
六坂 七畑 八樹 九杣

○水邊

十隴 土浦 付海沖 十二濱 付為原
十三磯 古江 十五湊 十六汐 十七浪
十八海 十九川 付劍水 二十池
二十一澤 二十二沼 二十三井 二十四堤 二十五岸
二十六碇 二十七樋 二十八我 二十九井 三十関

○居所

三殿 主樓 主宿 付主 主
主卷 主軒 主戸 付主 主
主床 付中 主里 主里 主里
主庭 付砌 主五 付面 主五 付面 主五 付面

○植物

一松 二杉 三楨 四檜 五檜 六檜
六森 七草 八薺 九芝 十菅

土 康^モ 土 芦 土 蓬^{ヨモギ} 土 品 土 洋^{ハクヲ} 土 五^{イナ}
去 び^フ 土 藤 大 竹 五 菽^{マメ} 千 畝^{イナ} 畝^{イナ}

○生類

主鷺
主
主
主
主
主

王 駟 王 鼎 王 冠 崔 此 神 名

主
龍
主
牛
主
猪
主
虎
主
蛇

主孤 堃 兔 火 猫 亮 接 罕 大

王
𤝵
𤝵
條蟹サカニ
𤝵
𩺰
𩺰

の
雜部

一日付空二星三朝付四夕付五夜

六 雨
七 雲
八 烟
九 付荒
十 油

土
虹
二
天
十三
鐘
田
野

去市七里
大真少十九
柴薪二千

主
主
主
主
主
主
主

付 花の油 共 遠火 共 毎 日 焚 け ば 光 照 せ ば 好 也

辛竟主會並
火 無火 火 車

金
紙
碑
扁
製

三才 初會 例ありぬ 左遷 基

来 翰 四 詩 五 哥 五 入 五 子

五 琴 五 笛 五 糸 五 糸 五 玉

五 錦 五 仙 五 一 五 乃 五 唐

五 都 五 君 五 五 五 五 五 五

五 宿 五 調 五 五 五 五 五 五

五 家 五 五 五 五 五 五 五 五

畢

正月 ひとこといふ月 初月 日

一 五 五 五 五 五 五 五 五

今 五 五 五 五 五 五 五 五

年 五 五 五 五 五 五 五 五

〇 五 五 五 五 五 五 五 五

五 五 五 五 五 五 五 五

五 五 五 五 五 五 五 五

五 五 五 五 五 五 五 五

孫人の心を接む、生苗の小をふくむ、師頼

淡々撰

上
一升 付志く升、異名主又別 有と

楊芥 小芥 綠絲芥 白芥 紫根芥

之挽
之入
家山
六之
川
本
元

○少清一法 憚り小思入わざ末流

高麗の水
之代入と
異名白根草

[illegible][illegible]

賓客 柳公量 柳義 客の柳 柳のむく

以爲種 乃種 乃種 各乃種 乃種

物の点 妙の梅 砌の栞 栞の末 やうな栞

考 考 入 邑 名 消 賦 之 經 曰 志 乃 苟 矣 又 國

魚の音まの月 初瀬雅波くぬ山

所々云々云々云々云々云々云々

いひな袖よりむむとまゝ眞月より通

Red stamp or mark in the top right corner of the upper page.

Handwritten text in a cursive script, likely a mix of Chinese and English characters, arranged in several lines. The text is written on aged, slightly stained paper.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the upper page. The text is written on aged, slightly stained paper. There are some red marks or stamps on the right side of this page.



わんをんかはらむも 福うか なるあふふ

^{秋夜} 月よりのこや 秋は月見とぬかんの白き土馬鹿

^主 市へはなまあつ白き土馬鹿の白き土馬鹿

うさう金銀 土馬鹿の白き土馬鹿

○春の海老 土馬鹿 土馬鹿 土馬鹿 土馬鹿

紅くはなふさふさ 月よりの白き土馬鹿

目録 土馬鹿の白き土馬鹿

^{新吉} 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿

秋夜 土馬鹿

^春 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿

一馬 初冬の土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿

土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿

土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿

土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿

土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿

土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿

土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿 土馬鹿の白き土馬鹿

二丁のこゝまゝに 鐘の音も消

月夜に花の影をうつす 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

とていふことのきこえは 花の影をうつす 花の影をうつす

お志賀の浦 浪あらしの磯 思ひ奪ひぬ

冰消田地芳雖短

古
冬月より春の初めまで

詞
少く、素の勝手く、是の痕より、其の
屋

五
ふあふ
浦凡あふふあふ
五月より三月

五月より八月

○戸のあき
まふ
はる
はる
はる
はる

まゝ小田 冬々々新 他乃新 黄代のみり

一主
車風
二風
胡風
三車風
四風

美乃兒 事荒 ○ 王面 柳々 東明家

舟
乃
浪
去
冬
凍
東
頭
風
度
解

素心之折々
里

とある。白ひきをよ柄のむね、一ちしそ事上る所、若

五去雨 去の中 二 雨 五のめ 五

[illegible]

雨表 浮生の西の青柳 吾情のこころ

世乃保侯公
笑苑
子
家
采蓮

王
月をさすくさきおあやてふやを八組ふるるさ
さき

三
しりきおきくやあつふさきさきさき

春月 朧月夜ふるさきさき月々さき

月々月 土用月つ屏厂まふさき

さき 物つりさき花のさき やさきさき

さき 山さきさき袖さきさき

山さきさきさきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさきさき
陰井

王
一 月さきさきさきさきさきさき

○ 月さきさきさきさきさきさき

さきさきさき

二月 名史衣 柳月 月々 月々

王
一 柳 青柳 柳京村柳 柳さきさき柳

柳 柳乃編さきさき柳 乱柳 柳さき

柳 柳乃川柳 柳乃柳 柳乃柳 柳乃柳

柳 柳乃柳 柳乃柳 柳乃柳 柳乃柳

古柳 朽木折 〇〇折 茂氣柳

〇美凡 美川の池の岸根に雲の吹く

庭の露の小田の苗代 高き清の柳

花柳 蜩の涼 葛城山 佐保川 淀川

吉野川 鞠の庭 〇柳上 鶯花 序々 琴

〇離別 河辺 館柳 條 〇東岸 西岸 遅速 不向

味から 永く 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

道 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇雄子の色 名消一野 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

善乃為柳陰 宅在 庭中 武義野

春日野 春山先生

美入事勢の考へしれとるるは、
 沢田の案も、ある事人、
 所北

[illegible]

三十一
一畑
付野等々、新元元々、之の唐土
巻古相 畑方一巻

○東山堂 長子あり甥を之に授けし 壬子年

興山令

三
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

うたがえをうたへてふ野 ありては

家原

長外之駒もまうむけを東に候ふなり

春駒 わるゝ駒 いふゝ駒 兼ふゝ駒

いふ事野。○新次郎。王乃野。横次郎。

又又芦の只美里今々とくらん

[illegible]

かきす田 田之とすきけす田 いそ まね

○庭のあかすみの色のうき 春のあけび

花園 去ぬの心 秋を 雨の朝日菊

三 為所なりとて 春のあけび 秋のあけび 秋のあけび

秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

牡丹花下 睡猫兒意

は蝶ののましからす

秋ハ蝶ののましからす

秋ハ蝶ののましからす

三 秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

一 秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

○ 秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

一 秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

○ 秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

梨の浦 梨花 長年 春雨

一 花 初はのあけび 秋のあけび 秋のあけび

秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

秋ハ蝶ののましからす 秋ハ蝶ののましからす

たうふふふの龍形のうさぎ花血むの根

むの香花うさぎの葉盛むの心心花うさぎの葉盛むの心

花衣むの深の夜詞のむ

〇雪うの物うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

〇雪うの物うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

九重の菊城山幼歌山養得養得自自花うさぎの葉盛むの心

長乃三有蜀山うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

此の葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

〇雪うの物うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

〇雪うの物うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

〇雪うの物うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

花の散ハ 雨のうさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

〇雪うの物うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

〇雪うの物うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

〇雪うの物うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

〇雪うの物うさぎの葉盛むの心花うさぎの葉盛むの心

花園 志賀

もみぢの山とて
もみぢの山とて

心なり 桜とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

一 桜 八重桜 桜 桜 桜 桜

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

春とていふ 春とていふ 春とていふ 春とていふ

一蛙 井よの垣 まて蛇 焚のりつと

岩下さすの蛇 石井ふぬは蛙 焚蛙

○小田の古口 魚代 池の古井 井の古雨

魚代 井の古雨 江の古雨 焚蛙 焚蛙

井 神南使川

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

一 井の古雨 まて蛇 焚のりつと

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

井の古雨 まて蛇 焚のりつと

松の森 松の森の森の森 池の森の森

河の森の森の森 河の森の森の森 河の森の森の森

主の森の森の森 主の森の森の森 主の森の森の森

白河の森 伊勢物語 紀の森の森の森 白河の森

古 松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

古 松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

松の森の森の森 松の森の森の森 松の森の森の森

橘（左）へすなるりしつゝむらさきとてわかれし

卯（右）のいろはねあふくつと月桂のよきとて

一新樹 六 あつる系 木のおき 木つる様

あまうしつむ 木本をいふのん何とて

あつち （左） 木本をいふのん何とて

とも （右） 木本をいふのん何とて

あつち （左） 木本をいふのん何とて

あま計とわらふ 春草おとされし

神系 七 大原系 （同上） 輪明神 一稻荷系 （同上）

一栗野系 （同上） 仁徳といふと一松尾系 （同上）

一廣瀬竜田系 （同上） 一吉田系 （同上）

一加茂系 （同上） 地として神系を有る加茂の故加茂

付事ありし他名所は加茂のみなり同系なり

○甲入のけま けく小車 衆人歌のけま

白ゆふ 春日大原の系と計は七々 小田のけま

ふきか 系といふ凡 あまのけまのけま

一 葵 わびま 二葉の葵 三葉の葵 四葉の葵

三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

○し女子 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

一 久草 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

刈 三葉の葵 三葉の葵 三葉の葵

五月

池のちち○新入下春 池の橋 小あさひ
五月雨 とうりきいあやにいわく 里人

ふはのを 沢辺の道 渡のころ

あはれおの世とともを けりあやもたなを けり
あはれおの世とともを けりあやもたなを けり

古 河合やうき入のあやうあやもたなを けり

エクス 一葉玉 油のまむ 白ふまむ 枝のふまむ

○大い人 あやう なる 砂盆

一むちと入日 一のあさ 油のまむ

ムーサ 大い人

一あ竹 あさの竹 今年あ竹 庚子あ竹

○五月雨 打入下春 空の雲 色 友の月

園生 下春

一五月雨 みのの比 ともあやう 青う

き五月雨 さみさみ ともあやう 初入雨

さ月のあ ともあやう 魚 豊備

月あさ ともあやう 道のけり 橋のら

子規 二のち亀 富士入を 袖の明淋しき

日暮る旅に宿 ら越え川橋 なるをりこ

廿月ぬあましくびり余やまほの客は海も一とせ

玉清のるひのこはくも経く程うさこころねん定業

五月ぬよ日もまぬかり値をさふのこゝろな

初くいづも 夢は麻の半淋もさる五月のひは成

一採麻の半淋 なる門 夢麻のま わるさす

○里のめり 残の園 江戸 生る浦

採麻のまの浦にまをるもわるふか北は後北

一わらさる けり井のむさなわらさるるむ

けり井のわらさる わらさる まよ 紫陽草のむ

し夏八月 夢のま 室

わらさるのまをさる 夢のまをさるのまをさる

一子苗 子苗のうさつ 夢のまをさる 何さ苗

ふさ苗 子苗のまをさる 何さ苗

○五月雨 夢のまをさる 何さ苗

古
青月はる橋のまじけき真合神のうらうら
主
一鮎 鮎うが外鮎はるまやかさるま
○まきぬ 文川の月流茂の厚宇治川

大井川 桂川 松浦川 玉鴻川

主
朝のく日休つる桂鮎わのばくふたもうじ 信實
かき川へなぬえはけきとてと鮎う河のわが家
主
一鶴舟 うらび舟 下す舟 鶴舟へ無うはる月
はる月川 夜河う舟の記を くまき橋

わく橋 橋のわく名 名は居橋もオ○月うさ
主
短夜 川かの虫 大井川 桂川 宇治川

主
うらび舟うらび舟の武夫のうらび川の夕園のそ 葉
主
一百合草 うらびのむう葉のそ 葉原百

合草 うらび百合草 坪内うら百合草

し虫 庭の葉 鳥の葉 坪内うら葉のそ 灯
主
野のうら葉 真野の入江

曹家集
白鳥の葉うらうらうら入る面まわく庭のうらわ

石とては、海松のこゆらとて浪守のりすふ見とて後續

一海松 海松刈 海松むらふ 海松布刈等

みづささうき海松の破入浪傳むよう海

満汐サヤ 茂る草 うきこもの凡 真流地

伊勢海 難波大淀の浦

いんあはれはうきみあうくまうわのやん里 家

うきも付く字 海松うけうゆえあすうきも

ま月はうの月 月うきの月 椿まの月

一真流 真流刈 真流草 真流茂る 真流

ふさ 沢の真流 沼の真流 入江の真流 流刈

小舟 花うきとるく 〇沼の 入江 舟 舟の 星

あやめ草 芦也 淀の 渡 三島に 玉江 町

二〇〇〇のふさのうきまはれおあまのうき 刈るふさ

一麻子 かなたむ 麻子 麻子 麻子 麻子

刈 麻子 入野 麻子 入野 の 住野

〇ふさ 入野 田中 入道 お藤く 〇 〇

本まげの道なり。うのまのむくを
一とこり一移むりり歎持を
こととす

やうりてこりすりやう男のり
日ぐ日とりてほくすか
あは持を

ますかえくのかけほくのか

○照射トモシ ぬんぬ野 系原 葉ふけ 本原ふ

晴ふ月雨ふ城や 青山松津 箱根山

千
よりし箱根の山ふより下りるを
松後 松

まむの袖 まむの草人 螢火乱施 秋已近

車入り 雅波 芳名 舟 腐草化成螢 金

雅波江のまをまきくまをまきく舟のうきまをまきく

ゆきまをまきくまをまきくまをまきくまをまきく

まをまきくまをまきくまをまきくまをまきく

一故を火 故を火 故を火 故を火 故を火

うやうや 故の煙 五 故の煙 五 故の煙 五

うやの夜 賤の草や 草の菴 菴の土 土の真

故の草の草の扇 故の草の草の扇 故の草の草の扇

故の草の草の扇 故の草の草の扇 故の草の草の扇

一蟬 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛

蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛

うやうや 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛

うやうや 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛

うやうや 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛 蟬の毛

一短夜 短夜の夜 短夜の夜 短夜の夜

○子紀の二と 敷のよ 亥月 亥の月

ゆづ持丹 拾つて残すも 枕しき別

音 ぐさもあることばうのやぬむの標定よりす

一亥月 亥の夜月 明やすき夜の月

○子紀 うづまむ 晴ふ九月雨 秋意露

夕まの夜 霞くく山 細涼 堪ふよりす 扇

海乃面きことぬな夕まのそらけりすも月

七月 うづま 凡の月 くる月 亥月 亥月

一氷室 氷室の調 ○ 氷室の調 氷室の調

氷室の調 氷室の調 ○ 氷室の調 氷室の調

亥の月 氷室の調 氷室の調 氷室の調

亥の月 氷室の調 氷室の調 氷室の調

亥の月 氷室の調 氷室の調 氷室の調

亥の月 氷室の調 氷室の調 氷室の調

亥の月 氷室の調 氷室の調 氷室の調

小室の調 氷室の調 氷室の調 氷室の調

氷室の調 氷室の調 氷室の調 氷室の調

あつてはなれうみはあつてはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

はなれうみはなれうみはなれうみはなれうみ

〇又ハ此世の世に於てハ
 網の道は人
 天ハ作レ國ハ人
 〇又ハ此世の世に於てハ
 網の道は人
 天ハ作レ國ハ人

〇又ハ此世の世に於てハ
 網の道は人
 天ハ作レ國ハ人
 〇又ハ此世の世に於てハ
 網の道は人
 天ハ作レ國ハ人

聖
一
を
の
家
は
お
月
の
ま
り
と
く
な
る
の
心
盛
々
と
し
て

冲津嶋山日乃入山又小嶺

一^聖扇 あし扇 ももあし扇 ふ扇 扇の音

白き扇　うき扇　ななな扇　吹尺の扇　扇の

冬 未如扇 庚子

○堀江の袖園乃心牧舎便り別冊中

凡
 君乃公卿大夫
 乃公卿大夫
 乃公卿大夫

東山門 生力松原 消之石 封地

夕雲大坂の女房と申すは扇の月をうけい

とわす弁の姫君流し人のこゑきこゆかやん
 扇ふはあとりて海かきとるけるはとまきふか

つゝもつちを消えぬてのまゝなにも同く三ろ五

[illegible]

此は六生の聲をまゐるゝ下層の凡の聲を把つか握とす

一清の清、清の汲、泉を清くするなり。

清の清の清の清の清の清

三ノ野ノ道柳陰堂岩屋

其池 草花のまに 相見山

陸房

便所

ハミ漢 寺のうらふしとて 庵の清のうらふしとて

聖品

一暑日 暑さのふりく 暑さのふりく 暑さのふりく

〇端のすき 蟬の声 月夜 蟬の声 月夜

乃む せうき 竜 碎心 抱て 思ふるこころ

閑

涼や せうき 村無き せうき せうき せうき せうき

聖品

一納涼 夕涼と 朝涼と 下涼と 涼し 涼し 涼し

立寄む なるこころ 心 涼しき なる余ふ

なすふ なもとの 袖の 花 雲 花 相見

夕立 湯居の 袖月 柳 花 茂る け

露 金道 橋の上 川 浪 竹 我 明 玉 網

代の 床 ぬく 小川 花 雲

風 くる ぬく 川 夕立 花 雲 け 家 陰

松 けの 雲 花 雲 け け け け け け け け け け

せうき せうき せうき せうき せうき せうき せうき せうき せうき せうき

一秋 道 なる 秋 侍 秋 〇 行 雲 け け け け け け け け け け

七月

[illegible]

七女が笑ふも何の月夜とて落着
 候方 秋の初夜 萬竹の声 九条の秋 河舟
 流も 悲 ねと有りう笑 せねあや
 渡り船よりふと見せたる年と夜はた 仲實
 庭の面よりそり向う望みのとせぬようす影のそ凡 入るおと
 一張署 せと残る 〇深もの袖 秋の故の色
 志の合月 袖とこきしめぬやと くらぬ餅
 せやうに付秋納涼 せやうに吹凡 袖せやと

あむやうふ秋涼し 秋涼し

○月乃袖 飛葉 窓の衣の夕の虫の鳴
折あけ 川辺の道標の上 森の下に
秋の調の笛の音 凡そく 袖の家あけ
あけむ 夕の風 あけむ 夕の風
く 曙の月 ○ 曙の袖 菊の香 秋の家
衣の香 夕の風 夕の風 夕の風
秋の風 夕の風 夕の風 夕の風

秋の風 夕の風 夕の風 夕の風

秋の風 夕の風 夕の風 夕の風

秋の風 夕の風 夕の風 夕の風

秋の風 夕の風 夕の風 夕の風

秋の風 夕の風 夕の風 夕の風

秋の風 夕の風 夕の風 夕の風

秋の風 夕の風 夕の風 夕の風

秋の風 夕の風 夕の風 夕の風

涼しき言 茨折 虫入音夜野

秋凡たゆる まひくま村

^{あま}露之袖を物に衣てて元風必秋のあひるを^{大上}

^ひ秋のあひるま村毎まを衣て夜必虫の相をを^一意

^日糸袖八草の房より花をもとるを衣てを^一衣

^主一芳 朝芳 夕芳 露芳 秋芳 川芳 芳石

ハき芳 芳立たないく芳 芳ゆふ人 芳屋下

芳屋 芳屋 芳屋 芳屋 芳屋 芳屋 芳屋 芳屋

を芳芳がれ 芳の海 芳の下

夕露 何れ月ほつ 藤の音 岑山

を芳 檜原 秋の野 川 秋 秋 秋

行舟のふり 秋の夜 情のふり 丁

西 室原川 阿武隈川 鷺 洞霧山 雲 帝道 冬

かろく 明月 石浦 乃 朝芳 乃 夕芳 乃 秋芳 乃 冬

何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ

何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ

月ノ久キウ方ホウ月ゲツ月ノ次ジ月ノ支シ天テン照ショ月ゲツ夜ヤ渡ド月ゲツ

卯の月
 辰の月
 巳の月
 午の月
 未の月
 申の月
 酉の月
 戌の月
 亥の月
 子の月
 丑の月
 寅の月
 卯の月

今月の月

費

卷之四

下

五月

良上

五月

十八夜、所立

Handwritten text in a script, possibly Indic or Persian, located at the bottom of the page.

二

萬

四月十七

居

待月

夜

孫まことの月

夜

22

月
廿

正月の月

1

平月夜

口々も、この奥の泊舟所のあつた心づ

是亦所以於心起身何多之於永夜

芳々々々々々々々々々

夕曙 浦才 明石 浮廣 伏

秋のふしと雲のふり
南樓月下揚を夜

白鳥よりねむるに飛入の救ふもあらず乃の月

田中平三
 田中平三

月雲中穴也子孫多事也

一 葛 蔓のふさふさう 真葛 叶ふふ葛
まきふ 葛 今凡 くら葛 葉の葛
くら葛 入ふふ葛 くら葛

神匠 賦の くら葛 葉の 露の 枝の 梢

野 花 くら葛の 思ふ くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの 住む くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの くら葛 葉の 枝の 梢

一 秋 秋の くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの 住む くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの くら葛 葉の 枝の 梢

くら葛 蔓の ふさふさうの くら葛 葉の 枝の 梢

為れり 為る事 為らん いふも 為る也
為る也 為る 為る 為る 為る 為る 為る

尾心 初尾花 尾心浪々 尾花乃袖 尾心
乃殺 尾花乃袖 穗心作 信助乃射
山家乃

信劬射
山系

爲之神威也。薄ハ古記、竹里、
作上七月二十日。家、古家。

作是七月
典乃青
わと
夕
岩根
古塚

田而會小倉聖山田公附

嘉吉
若くは一田の町に村をうつる人ありは鉄の口を

善

會小倉聖山田公時

二、我、我子、あつた、我、打、出、る、我、我、の、凡
 我、の、声、我、の、を、凡、我、の、音、信、我、の、を、く
 我、の、我、我、吹、凡、候、我、我、の、上、を、は、て、我
 我、の、と、り、青、我、の、と、り

我の聲 我を凡 我の音信 我をく

藥乃氣
 氣乃凡
 候氣
 氣の上
 乃凡
 氣

義の友と久青 義の友と久

淋一々々 赤涼 水の下 赤 初秋 一々々 秋

羊毫とて人
祢是の枕い
後月

予のふとて、
伊よりあぬじしを
中何のうへに
おのれ、其者ど
りていひ

○奥入るる麻は凡そ朝寺小僧は

うはら月

主

朝顔 ひと朝を 色朝負麻より朝

秋日新まら朝を ちりく物秋朝負

○乃又新まら今朝の朝を

○後日新 赤れ色 赤れ下庵 是竹介末 秋

赤れ身の薄き 後 わさうかふ秋をみ

秋に 赤れ色よりこれより秋を朝を 秋

秋より赤れ色よりこれより秋を朝を

秋より赤れ色よりこれより秋を朝を

秋より赤れ色よりこれより秋を朝を

秋より赤れ色よりこれより秋を朝を

秋より赤れ色よりこれより秋を朝を

秋より赤れ色よりこれより秋を朝を

秋より赤れ色よりこれより秋を朝を

秋より赤れ色よりこれより秋を朝を

端の月夜に夜を越えぬ

伏見原の油田に雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

小浜の月夜に夜を越えぬ

油田の雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

油田の雨を降す

主 往路の時、舟の下へゆく舟の鹿をまゝとて浦凡に島
日 へてあわさるゝふしに、こゝろもうぬ武腰のねまき

主 小なる狩 蛇をくひたり もをむかひある

神の小なるも殺小なる小なる狩場 小なるとて

はくぬの狩場 二つて終て中なるをぬか

もとよりなるふと尾なる日

あふふふろ 露拂野 砂浜 思越 萩京

花野 夕の月 藤ノ原 野ぐふ大井

ま ひと野は秋衣とのき動をく小なるおたるをぬか

八月 某月 秋凡月 ちひ月 八月日

主 一箱系 箱主のむじけ いふと箱主のむ

うろくこ箱主のむ箱主のむ箱主のむ箱主のむ

山田寺 小田のむ子田衣のむ 田衣のむ

け縄 山田のむ子 田子のむ子 川音

○山里 康の戸 夕露 秋凡 子入電

芦屋 芒屋 子入 子入 子入 子入 子入 子入

紅な夜のさびしう 衣手の露

山麻の青からうすな光いかにあつた時鳴くお山を

山麻の傍からうすな光いかにあつた時鳴くお山を

一思草 三月三日

〇袖の露のさびしう 衣手の露

さきも青な生れも 尾じり 妹わたり

布 五月

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

ひまわり草のうすな光いかにあつた時鳴くお山を

門田のち舟路枕 蘇山 沢の 紅葉と秋落

衣襟 二すふふ山人 真砂地

秋は初ら終るふとや誰かまふけりきうん 前

古のまふ休の由まふと終るふとや 前

大にふふ月のかきくも羽田の面まふふ 日

まふふと輪の面まふふく 日

一羽 鶉のう 鶉のう 一羽 鶉のう 三十九

おふのた 尾むき 三十九

あふ 鶉の叢 月 深草れ里 三十九

うの真ふ 三十九

にちれ 三十九

と 三十九

一鳴 鳴入羽 三十九

羽音 鳴入羽 三十九

の 三十九

の 三十九

君より夜 休みの界 猪名野

曉の鳴のこゝろとてとて君とてあまをたぬく

これけのうらまはしうす鳴の床も和まはれ風よくぬ

百舌鳥 とて鳴く 人のあつてとて草花

した枝のあつて 尾むく未一村薄 夢のねん

林とて猪野 ともく未 紙の紙紙 思ふに

とての草花とてあつての約束のとき

まをたぬくまをたぬくまをたぬくまをたぬく

思ふのうらまはしうす鳴の床も和まはれ風よくぬ

これけのうらまはしうす鳴の床も和まはれ風よくぬ

百舌鳥 とて鳴く 人のあつてとて草花

した枝のあつて 尾むく未一村薄 夢のねん

林とて猪野 ともく未 紙の紙紙 思ふに

とての草花とてあつての約束のとき

まをたぬくまをたぬくまをたぬくまをたぬく

思ふのうらまはしうす鳴の床も和まはれ風よくぬ

崩築 くはる築や向くすて

○河の浪 浪る音川 水の紅葉 下す糸土

田上川 々々川 赤糸川

○河の川 水の紅葉 下す糸土

○河の川 水の紅葉 下す糸土

山川 うたの草 々々々々 宇治川

○河の川 水の紅葉 下す糸土

九月 小月 朔の秋 九月 九月

一茶 茶 々々々々 々々々々

○枕の月 あささ 霜夜 草垣 衣にき

淋 々々々 真葛 々々々 宿 夜寒

入すきよめ 葉の閑 床の下に野

茶 々々々 茶 々々々 茶 々々々

茶 々々々 茶 々々々 茶 々々々

茶 々々々 茶 々々々 茶 々々々

茶 々々々 茶 々々々 茶 々々々

九月

わが手 碓のほとけ音の 祿之の枕 山里
旅のうき 永夜 旅の家 わがひの宿
丁の声 文行月 旅人を待たぬ 旅の
の音 伏見の里 葛城の里 わが里 玉川の里
昔地は雲のうら 月を金 土市の中
千 花のうら 秋のうら きのうの川 入里 後れ
さむしうとさる 霜夜はよとさる くらげのうら 河内
今月 九月に長夜 千声 万声 無正時

中世の秋風とてまゝあるをいふ
 蘇よと今や老るゝの夕霜とくまの酒道 定家
 一菊 白菊 八重菊 菊の白くも 菊の赤くも
 菊の白くも 菊の赤くも 菊の白くも 菊の赤くも
 〇秋の胡蝶 菊の色 菊の落 秋の朝霜 紅葉
 月 酒 仙の宿 九十九 山川の流 井人
 酒 山 十ヶ所 大沢地 大井
 里長鴻 掉川 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上
 細代 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上 吹上

仙人の神白くまゝ家かたしゝ
 上初めさきう霜といふきそ
 一夜を秋ききやえき
 月の下風まの下の電紅まら
 上初めさきう霜といふきそ

一冷——御冷——月冷——霜冷——袖をきり
 するは——○秋の光——赤の青——月のは
 痛——片——あ——う——枯の草——枕——浪の舟——も——ち
 秋の雨——秋の光——秋の光——秋の光——
 一草——草のう——草のう——草のう——草のう——
 山根の草——草のう——草のう——草のう——草のう——
 草のう——草のう——草のう——草のう——草のう——
 まる——秋の神——秋の神——秋の神——秋の神——

秋のふもよきけや初秋のききけれ 後ひかへふ
主 紅葉 薄雲の村のききけれ 秋のふもよきけ
あまの 秋のふもよきけれ 草のききけれ 山のき
山の錦 秋のふもよきけれ 秋のふもよきけれ
植原 松菊 霜 男麻 岩垣 飯酒
とふき 森 車 道の 行事 小倉山 大井
とふき 森 車 道の 行事 小倉山 大井

停車 坐も 楓林 暎

秋のふもよきけや初秋のききけれ 後ひかへふ
主 紅葉 薄雲の村のききけれ 秋のふもよきけ
あまの 秋のふもよきけれ 草のききけれ 山のき
山の錦 秋のふもよきけれ 秋のふもよきけれ
植原 松菊 霜 男麻 岩垣 飯酒
とふき 森 車 道の 行事 小倉山 大井
とふき 森 車 道の 行事 小倉山 大井

月の友 秋のふもよきけや初秋のききけれ 後ひかへふ
主 紅葉 薄雲の村のききけれ 秋のふもよきけ
あまの 秋のふもよきけれ 草のききけれ 山のき
山の錦 秋のふもよきけれ 秋のふもよきけれ
植原 松菊 霜 男麻 岩垣 飯酒
とふき 森 車 道の 行事 小倉山 大井
とふき 森 車 道の 行事 小倉山 大井

琴 詩多 しの席 林間煖酒焼紅葉

露霜 霜のまじりし雪も好く 以田吟 月

紅きうけうす菊草の表枯り 雪の虫の青

秋まき 秋まき 假沖 落葉を涙びして

秋まき 〇村にまゐる 麻 ときねん

や青 袖の涙 空の月 秋の月 野山の雪

物おし 袖 涙をぬきぬき ねん ねん ねん

ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

〇秋の月 秋の月 秋の月 秋の月 秋の月

秋の月 秋の月 秋の月 秋の月 秋の月

秋の月 秋の月 秋の月 秋の月 秋の月

秋の月 秋の月 秋の月 秋の月 秋の月

秋の月 秋の月 秋の月 秋の月 秋の月

秋の月 秋の月 秋の月 秋の月 秋の月

秋の月 秋の月 秋の月 秋の月 秋の月

秋の月 秋の月 秋の月 秋の月 秋の月

[illegible]

今
瓶に岩をばくふ鴨さへ入るもさと鑑しなり
古
朝芳のちまうらん方柳が堅すめり人
一斗へんう枯草中と野山と枯花之

草木と野山とを枯朽せ

○春霜 个々生乃青 秋 更以秋

わくある男麻の床 俵をのり枕 なみ具堅

一椎 さう 枝推の下葉 岑の推葉 推の

まゐる枝推の下葉の推葉推の

稍
推
推
推
推
推
推
推

推珍推の乗陰行端の推

推乃爲凡。秋凡霜重。思切。

霜重人思切

山越の野々 落山 松氷山 次二

軒之
客山
松山
山
山

[illegible]

卷之五

志大將

いふは道なりとやきりて生るは世とて縁のふ
信実

此道より三つやきり及生るを世と三條のれ

信

五
三
六
正
これに於て未づる譬やなまの山入るもの推し

と云ふ事、
 此の山入りの推察

卷五

一
象
落
栗
以
象
此
本
象
紫
紫

落栗 似栗 此栗 栗栗

子

梵

孝山族入園

マニラ
接合

生我

家

...

1

...

1

10

1

山内家の所より多くと遊み落お大原の里に定む

孝のゆかりを多くと遊ばるゝ大原の里に

木乃々 木乃々 拾乃々 落乃々

林の末の拾三の落書き

○秋凡 奥山 山望 秋初多 接ふまふしと

時を 霜 山後入園

一^{幸三}畝田 霜入くて田 火田守 火田入霜止

と 新州 少く じけち田 むつらや

○麻の青きき 次き次うわめまほ 霜

秋風かー じけちききー まあ秋

一^{幸三}畝秋 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき

○まじりし 秋 枯葉ふりふり 秋きき 秋きき

奥きき 奥きき 奥きき 奥きき 奥きき 奥きき

くくくく 網代 まきき 秋きき

くくくく 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき

十月 小ま 秋きき 秋きき 秋きき

秋きき 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき

小夜付 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき

くくくく 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき

秋きき 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき 秋きき

[illegible]

持場の三二 狩ゆり維子 ○ 臼井油砂酒
みよと 世の道 雲浮山越草枕 を四六々
うず野 駒ぐさる 服縁坐 大原 行幸
ふ 並の虫 小塩 維子の作より
まゝいお塩のまゝいもの まゝはなをみるな
けさかたき狩の時 冷氣夜のまゝくまゝとりて原
氏へまゝくまゝし時 大原より

野原古
けさのくらふもふふあふ斤かふふふふふ
忠定

河ふとまうりさ 泉川 淀河

一書 初書 白書 候書 と雪 夜すけりる 雪気
 薄書 いま雪をうへに雪をうへ ふうきい かきぬく

うき
きり
けし
く

〇さうぢ 大由む山 曙ふ山 遠山を山望
 町あり秋 栢 冬亀ふ居 冬の梅 ありける馬
 やう焼 木より 煙火 月 ありける花 ありける

夏竹 疏 疎より馬髪富士の道

雪似我鴛鴦飛散亂云

みり野うのうきやうにきくまものなとまがれつ

萬事の成る所を成るにまかせし
 山

乃ちあつてさう云ふ終つてあつたを附して肥後

勢に事なりぬまふくまは撫の松山松尾を人際源
 月夜

我の吉原よりまわらふ越の強令りよのど

かきくけこけさくせん

十七
雲英

みづのくさ 雲降 雲して みづあふ

○ 我

竹の葉 月之き 松の玉 巻ぬき

山路 樹をよぎ

零漂

伊勢新宮の御

消之於海に於てきつては既に海に於て消滅す

六
爻 震 浮 たり 震 止 震 震 龍

りて衆を衆の善を衆の之致

○そよくらゝ原 文三店 源山 摺金 文三

河邊校至持湯之野邊

生々々山ふふのうう竹の空かきまう

五條よまななくさきけいともさるこころす。金天

右里狐狼の振をまきじと云ふなりう声々々いひて歌中

竹葉まゝなるをくはせぬまゝにこそは 智恵丸

新内
 春南
 遊之今全行校所
 新内
 能得

武家の夫あとなありそのふゝ妻なりあるすゝめなり

水糸
五月試樂をあると見ゆ魚見ゆ其より

日本人のくま
小忌の油
中衣ちうえ
ふわいの油ふわいのあぶら

○はれをけき 衆人 白敷の四 うたう声

神 手 砂 酒 物の青

子^{半中} 振かとの河凡 おのれ神よまなけきとらん まえ

ま 神みじ川にぬみてそそきとらんうたう声 室家

一^平 ばく せきく せきく せきく せきく せきく せきく

○山^主 嶺の麓 大原 せきく 柴の戸 雪の中 徳のむ夜

金^主 衣 夜の食 神の食 せきく 金 金 金 金 金

○まき 國 霜の夜 中 の 花 夢 花 花

野のふいふ せきく せきく せきく せきく せきく せきく

十二月 主 三を月 柳のうら

一神 樂付 燎 うたう 物 小使 神 手 神 手 手 手

神 手 手 神 手 手 神 手 手 神 手 手 神 手 手

燎 燎 燎 燎 燎 燎 燎 燎 燎 燎 燎 燎

柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳

うたう まきく まきく まきく まきく まきく まきく

○かろく せきく せきく 月 天津 星 せきく せきく

文吉白中 九五八庭 砂酒 九一の千

の燎ハ池の釜
鑪を乃けり
山頂
を二神永付と
るは永付と

子子狐神のまゝも夜々うへ今夜の神ふけふふや師れ

四
の袖より糸をとりて、
糸を白く染め、

古
痛ふむけと枯る柳あまきうゆき神のまね 賀之

二十三
一、煙火
煙火
圍火
消火
煙火
煙火

うゝ矢のきき夜霜夜の所をうゝ

書の下座 油のま うく香の心 ずりて 尻の下に

老の眠　くまなく宿の物

山室より夜半煙火も板屋の風は吹かこゝろく歌事

二四
入下り茶の筈ありて
三

冬入梅 冬候柳 冬木の所 冬詩初 冬を

年の心梅を隠し梅を野の所嘆ふを八木

○春日 春の朝日 長詩 南の志

春近き人音

梅のむれもなほ久堅のうゆきをあらはにす



金
 一思ひしきなりしと思ひし物なりし
 二思ひしきなりしと思ひし物なりし
 三思ひしきなりしと思ひし物なりし
 四思ひしきなりしと思ひし物なりし
 五思ひしきなりしと思ひし物なりし
 六思ひしきなりしと思ひし物なりし
 七思ひしきなりしと思ひし物なりし
 八思ひしきなりしと思ひし物なりし
 九思ひしきなりしと思ひし物なりし
 十思ひしきなりしと思ひし物なりし

那心在遷
遷心在祿
祿心在別

要他ぬわがふとにやうそふ家つる方とてまづらん

むなりけれ方三條、后とらむなりてぬるかと
くくどうきまふなりとて、そのまゝの面つらうに
とむ也

夫

わむぢりふをぢりふ寺ノ邊よりふむつり
ふむぢりふをぢりふ寺ノ邊よりふむつり

一
逢
逢
逢
逢
逢
逢
逢
逢

多
一
の
て
年
つ
多
あ
か
け
き

○かす子心 諸系云云 世に今口 人自夢人

侍従ぬかきほにう秋の思ふ入よりをまねけりまゝ
君^{わが}侍と国もいづれよ本なるいづれをえおん月^三
新ひのきしらゆき如くありまゝに也きその也^五も在
一恨^二恨のしらゝの恨恨倦恨ね多し積恨
いづれ恨し系恨かこはるゝみ
○雅面^二あしき人とするぬ方あざる人
さうし、忘る中日はのかりて涙とびやく
物のまゝあるまじ君ものまゝわらへば

君^も侍と国もいふも本なるいふのみをあらはす
 新^れひのきしらぬ夕^{ゆふ}よりよりうき世きそのの也 ^も在
 一^立恨 恨をしらぬの恨 恨倦 恨投多積恨
 いふ恨うふ恨かこはうふ

○雄ニ面ニ 必ニ之ニ又ニとニふニ力ニわニるニ人ニ

心より忘る中 日のかむ決とむく

物のき 五と君 きのき わんきん

あきまゝに
あきまゝに

子年入録しかく中く大念と云ふ假名
 相見

大徳の振作もわきまみてのとも男浪人
あ

幸のわの天中眞香京くみ良寺架の辰子羽

笑
笑
笑
笑
笑
笑
笑
笑
笑
笑

○
い
と
せ
い
け
う
ま
わ
を
し
め

穀之乳中新地

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

一別 別路ふの袖より別いそ別 ありけり

あつみぬくさぬ別別

しる音 障のも 涙 夏 夢 夜 語 残

しるもあ かの月 今 しのほをきかへる 行舟

袖の袖 横をきまのし みる末 道のつら

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

いづれにふりておぼえたるはじきとほ

一五名
二六名
三七名
四八名
五九名

及至三月
 李君悉定
 ○ 乃使
 神志

いふ中、一夜の突、久を病と爲す所

とらん
わうやとわん
心
世よりまし
かみ流妹

今月乃月 名亦々句作也

古
事
記
卷
之
五
年
爲
去
水
川
の
水
は
水
の
を
お

浮舟の君の無鄰 卿とあつちをむすぶは
力と捨つるむしと

一族
一族
我族
漢川
袖手須
袖手

力之強以之通袖康乃海

○根ふけをふくふくふく
待ふて

事物類聚 物乃未
ととて世
う處
秋人の夜

衣裘始於忠孝終於節義

子規等の決まらな

[illegible]

世六十一歳と云ふ人の涙の海といふた人

猶きみ孤々れ契のまき夜月分少びと月分
 佐馬

千
一うもしや なるれり 一東あ

〇くさき矢 くら別 旗乃宿 泊舟

野上へ里 三崎江 難波江 候あ

仲心

ま 川の風 浪の森を ぬりくもたなれど ぬれん

王 いとしり 妹りの道 妹り行

〇備中 行袖の落 子鳥鳴 あり門

きく 関の戸 三はの中

太 ありは 妹りゆきまその 妻の 何風 ぬきまの 貴

山城の 名は 中 妹りきま 妻の 何風 ぬきまの 貴

〇くさき矢 くら別 旗乃宿 泊舟

野上へ里 三崎江 難波江 候あ

ま 川の風 浪の森を ぬりくもたなれど ぬれん

王 いとしり 妹りの道 妹り行

〇備中 行袖の落 子鳥鳴 あり門

きく 関の戸 三はの中

太 ありは 妹りゆきまその 妻の 何風 ぬきまの 貴

生きたる人 暮 中川の宿 金田の山

くむまゝ人々を運ぶ入のわたりみさやうの事
源氏中河の宿にたふれは小君の車よきて
て行かすやと蟬ハまじむとて共暮るゝを
玉源氏くじむみふとて又はま植はるや
まーあひよはるやとて又はま植はるや
あふまの上の十斗に成るやとてふるやと

一休 不付がう付 世面新 付より

〇又 疾ニすのり人 誰小車 乱髪

秋 一 僧 花のさき ときき 焼も

付らとれ斗かたきえ大いしにけり高きうの宿

衣くの袖の明きくみて面けとむる方の月 信重

一と占方 ゆうきと占 けさき占 門は占々

けさきと占 〇定わう契 教ノ 待破人

日は携す首途 わやうき下 俣う人宿

一物の子ハ けさきと占 根床の上 乱髪落る

生きたる 小車に真 行く人 舟のりや

わがあはれはとて酒を人々ふびに接しとて
一さうりハ君よ夜月 物いみ 人の福を
待まの雨 月 雲花凡 あはれ 又行舟は
わいき浪凡 下次後高き岩かと あはれ 女のあ
罪 あはれ ちびと平急 経る夜の世道れあまやまの
あはれ 心とてさう小舟入 船まきり 世を何うい人 あはれ
一わさあう あはれ ちむむはうあき心 ちんさむい
偽 有今下 朝良 ねさき中 消ああ

あはれきあはれ なれり ちんさき

わさあう あはれ ちむむはうあき心 ちんさむい

偽 あはれ ハクけえあう中 ちんさき 恨 あはれ うき世

うき世 あはれ ちむむはうあき心

津の国は那波の川を隔たふ世なりとあり あはれ

偽 あはれ の名とてさう あはれ ちむむはうあき心 あはれ ちんさき

一お あはれ ちむむはうあき心 ちんさき 物 あはれ やん

ちんさき ちむむはうあき心 ちんさき 神 あはれ ちんさき 初 あはれ

法師師 川湯をぬ

年なるぬきつゝ兵部卿と山尾上の陸ねえのひき名案

一暮名残ハ別入袖 号久衣の移りも月

若身旅之人 園遊 今この時 玉糸 若

ぬき衣 俚 丁 ぬき 玉糸 惜じ心

一ゆきふきハ新 批 下 ぬき わるぬき あり

一ゆきり ぬき ぬき 語るぬき ぬき ぬき

ぬき 恨 涙のぬき

下 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

ぬき 琴の青 待人のぬき ぬき ぬき ぬき

一ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

は ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

一通路 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

今更なる世の國をさぐりてあまのつらき世の人

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

古 秋のやまの國をさぐりてあまのつらき世の人

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

一 聖王 ともなうくハ 玉座のうら はくろく せむ

わんざん 恨やうじつ こゝの船様

ぞいさけつうのまふくしんはさふさうな中と

こゝろにえふなりと伊勢物語なり歌と

くの中しをうむのあこ

市 土路のらひ舟揚りしに歌なりと松林やわなを

一ぬまきぬはるまじしじろ ちやふかお袖

髪をわぬ けうめと歌 になれぬ

甲 舟やうむくわくまきになれぬ浪のなまきまに

主

ふきしととふまゝ恨びる 歌のけうに

みーの袖の契 落つて中

紅の涙はさき袖のちをわさむくしやいびりゆき

是を縁合入のまき舟がうとりの中舟のしむすわを

舟のちと契のまき舟のちをわさむくしやいびりゆき

ち位のおまき 歌なりと契のけうにまき舟のちをわ

とすまきくらの中舟のちをわさむくしやいびりゆき

主 又初るニ・侍りしぬ ち屋のしや

まの下の 鞠の庭 おゆきをきこぞ

あまみくらぬききこえをわが名跡ゆきむのやれ
是れ拍本生つ雪のあこがれ信を韃の月一財を
ひびくうり女このもとと人初あむくばあ
と女うへなまふま中人立の信候

今更色は紅く、竊にうゑ枝はうへへも

物候考一書を終りみちびきあふ事なり

下^三ノ^二下^一級。雜面恥^二之^一。

秘
あやてしめくうかへんてうけまふひふ
本条三

五

三
一老竹齡を多し老乃令む世に於
むくまふ三十一むくまふあり
齡をけてはけりよくむ齡を多し

○社是やれは引籠る宿理あり昔
友なき月ぬじに月思ひの玉
新なる世
淋しきまどを讀み
学ば松花を
とよむりなりて

古
わらふ人こそよりたつてあはれこそたつてふと
人老

美人

小町へ渡り入るをいふ廿二の美人の姉君の母は
それを見て甲戌日入月入の住のよに
ハすはをきこひし

合ふはまにきこひしをいふ袖のきこひし
しは夜の思ふにきこひしをいふ袖のきこひし
みよの夜にきこひしをいふ袖のきこひし
みよの夜にきこひしをいふ袖のきこひし

七
夜にいふ袖の袖 山崎 海士人

きこひしをいふ袖の袖 山崎 海士人
甲戌日入月入の住のよに
夜にいふ袖の袖 山崎 海士人

夜にいふ袖の袖 山崎 海士人

も襦の女にの思ふに父の式にきこひしをいふ
いふ袖の袖 山崎 海士人

夜にいふ袖の袖 山崎 海士人
伊勢の海にきこひしをいふ袖の袖 山崎 海士人

夜にいふ袖の袖 山崎 海士人

此の袖 山崎 海士人
死にきこひしをいふ袖の袖 山崎 海士人

百あなをちり 秋人を送る 霜よ虫の糸を

かきとてしるる人の世にきこゆのまじり

もみぢの母相室の文衣のき

あふるあふるやとるこふよまのやいふ人 鳥

古塚。ねん 虫の生田をむのふ

草の袖も深き道 舟園 深草

舟の穂やう塚の敷てて首の人をさる 鳥

草の原へ古塚 橘の根糸 虫のき

荒小田 助知ちと

いふ世やうて消さるるもあふる 鳥

もみ月夜にむのふあふる 鳥

あふる 鳥

おねる月夜と袖うぬ 鳥

あふる 鳥

あふる 鳥

あふる 鳥

法の師 きえぬ法 法の師 きえぬ法

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

法の師 きえぬ法 法の師

羊のき 泊洲 嵯峨 高野山

二 夜を竜 三 雲の戸 法師の ひと 國傳

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

神祇 張之部

一 神 神五 神社 神祇 神事 神代

神の神 神の神 神の神 神の神 神の神

○ 文字 社 寺 居 朱の玉 煙の山 雲の山

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

一 夜の本 けふの山 雲のやまき

神祇

○浪凡丁の声 海江の月をき 漆江の中
左近郷 浦幸の月 池の二玉に方わ
志賀 いりふ 葉ふの泊舟ニ 暮る 浦幸 海江
八月 雨わき 浦凡 福も反枕うりま
てこそ待つてく 夜半 鐘声 空 船アリ
一駒の紅糸いづ駒いづ駒 なるむ駒
しぐ駒 駒の尻を 駒をて けり駒
くま駒 くる駒 くる駒 くる駒

ある駒 馬の上 難しの駒

し越え 岡路 なる花 山根の道 清あふ平

ちろの山 越 向け 舎り 渡り 将傳の駒

おま 相坂 佐野の渡 東路

ま坂の園の春 山をきく くるくるの駒 遠

駒 ありき くる 山をきく くる くるの駒 遠

一驛 路ニ 砂 酒系 松 都とく くる け

は 一夜 暮 日 ぬく 駒 けり 浦 珍 麻山

藤長子とある所は又二葉下ありては
 大石の國の藤に麻子よりとるなりとの家
 藤花を交ふなりとあるはむかしは
 一葉 花の野 葉花 藤花 藤花 藤花
 花根 花根 藤花 藤花 小葉花 花
 ○花根の床 藤花 花のうき 藤花
 花の下 花の下 花のうき 藤花
 藤花 藤花 藤花 藤花 藤花 藤花

[illegible]

一
抗
抗
抗
抗
抗
抗

松栢抗 岩栢 藤栢 麦栢 小夜栢 子栢

○岩根の床 御舟 坐のくつき 将々山

松竹 花月 雲之 水月 越後 山

事の目 爲る事 假令 國を旅の牛宿

伏久作夜の中。あふとてよ。整ふじはぬ。

凡そ福も女 浪の毛高き 草子へく

あつたてはうらなひのち郵へふれ抄にうけひと

道遠 釣うらふやの川 福あふの松と清むら也

朔日山崎の流の石橋よりこゝまでぬけぬ所の
一越ふ山路付道 通路 里路 越路 谷路

越子山路付道

通里馬竈廣

市路都路主路初級路新路少平路

冷麻路 正の生路

●道玉や二入を^き下道^きあかへる人
やりの道中道^きなりなり^き紙^き返^きき^きの^きた^き
類^きの^き山^き崎^きハ^き古^き海^き崎^きまの^きす^きの^きす^きの^き油^き
里^きと^き遠^きき^き袖^きの^き尻^き介^きの^き落^きや^きす^きの^き旅^きの^き道^き
来^きりの^き袖^き紫^きへ^きの^き一^きの^き紅^きま^きは^きあ^きる^き心^き
得^きる^き康^きの^き着^き心^き笑^き初^き水^き

出撰 草のあしく小き持 草刈の序 井の池
^ハ 刈をせやゆふの秋の果えたるいづれ人の事とてん 通光
 あつちうのゆふもあつちうの月ひきの袖とおけきなま
 二下
 あつちうのとてあつちうの備舟の上へさかたが越
 上 世おもひぢうとてくものきまてりしうく
^わ
 わすゝるをいふ園まれに花はとく今までのあつち
^わ
 わすゝるをいふ園まれに花はとく今までのあつち
 ねるのをいふる花はとく今までのあつち
 かつの平河の中庭候よりうらみおの月とあけ
 うらみ

三
一岡 是越邊ノ外西入岡野中の岡
○田中里麻草枕株爲萩原名久人
真采山岩代ノ野 佳吉明石

○林少の永岩掘り本寺地不主き
物に凡そ一紅葉捨人木のち袖山城
記さうとき月宿きよみと巻る小倉
さむ谷やまのまゝ人の下ろせしこ国信
一林林入系林の開く林名の林名
兼寺兼の兼林田林

○里入郷 山人松原花麻 秋高真山
山王の寺 寺火素山 寺田 寺田 寺田

坂

一坂 一坂 坂越て 坂の麓 山折 坂のり
 〇 爪の袖小襟 体よきり 坂きり 駒
 岩が杯 木葉 山の井 古寺のり 岩
 木曾路 坂の田舎 坂代
 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり
 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり

一畑 山畑 達山畑 坂の古畑 うり古畑 片
 山畑 坂のやけ山 〇 山畑 坂傳心 坂のり 坂
 黙木法 坂の畑 伏猪 細道 山根
 山畑の園の古畑 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり
 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり
 一材 坂の材 坂の材 坂の材 坂の材 坂の材
 坂の材 〇 寺のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり
 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり 坂のり

瓜木の乃 本骨抄 看城 小倉山

雲材 遷オリステ 糸ス 鮎ニ 閣ニ 是太内のの階の事ニ

新古
施の袖の
衣は凡そ
白に
き
あ
ひ
う
定家

一 杣
杣人 杣方 杣ひく 杣山 杣川

○ふん山松
もふん乃横原
時ふん山

山川花鳥を
まじへて
尾の山

三輪山田上山

三輪山
おとす

不^レき^レは^レち^レの^レ勢^レを^レま^レま^レと^レ声^レを^レた^レと^レて^レ住^レた^レ

瀧
源の系
源の系
源の系
源の系
源の系
源の系

居沙津
 沙好浪
 沙渡
 山石越淹
 淹川

海の上を飛ぶ鳥

○岩根 庭中 所 産 果 上 代

松陰材 あり泡 菱事打袖入涙 内系

古寺
古亭
布衣
名河
那
悟山

音羽

那春 明石酒 面

鳴溪路崎志が久入河 住古入溪

山ノ濱よりより更へじんの浦の自日わきより船人衣主
まのくみ魚のさることかへしより縁満きと方 浦凡

一溪付崎浮洲離 溪海溪也溪むし

溪凡 候傳む 溪我 溪嶽

●崎八十崎下崎 沖津崎崎山崎根崎凡崎法

崎凡崎傳む 離崎川崎 崎凡崎崎崎崎中崎

崎守崎むむ 連崎

●崎千浮沙千浮 崎とと 連千浮

●洲 七漏洲崎さう洲 川洲

●離 離崎へけ崎 離の沙やき 離の捨舟

●溪 溪真砂 松貝むら 田崎 松や入る

●浦 浦崎 浦松崎 崎并の色染しき浪

●舟 舟崎 浦ま八月 連金入崎 伊凡崎

●雞波 住うの浦

事遠きふ里の候は日へ事入 秋凡送る名代の松葉道

聲の臨海よりうみ松浦酒をよきとて月どりぬ
 智る方漆の仲のちまた例は津いけなる白波のみ家
^{お吉}
^{十五}芦乃舟の楚こいと雪もあふれし垣なり
 一磯 破さば破傳じ破かれ破に浪行く破
 破ありえ破 破入るくすゑに磯なり破くる舟
 くまき破 破王 磯ハ浪〇水松川泊丹徳
 岩下ノ松より浪浦 塩吸袖休ね繪巻
 と村ハ所小島

修 江のあま波より舟をたぐりて残るゝ凡そ世
新 山々の磯にふくむ砂地といふ舟をたぐりて家
江合さす江濁し江濤江こもりに細江は
○舟舟共々舟船浦崎尸沙人住村
街月か金鷄難波きの海住吉
わ 瀬川名多き松屋入りの旅まつらねれぬ
大 四條のちろみ浪ききと称え入りの月小直と云ふ
上 漆 湊に漆川・漆入舟 漆舟 漆田
思へ

漆 漆江 漆川 漆入舟 漆舟 漆田

立派行浪 寺浪 又百一の浪、おての浪
そと浪 白浪 浪の心 芦のよ浪、久浪 津浪
川浪 やまゝ入浪、わく浪 芝磯浪 井ふみ浪
遠より浪 沖津浪 浪へ寄 池の浪 浪の羽さき
浪のうき 浪のえき きこゆる浪 打さる浪
ちり水 下の波とう 竹の水落れ
岩振る 岩より水 葉の流水 ゑん暗に
あふみなり 水くさくさい なまなめし

とくすみ 王む わる水 ちる ちる ちる
名をとりとる

名也と云う

みと みたはくー みとろー みとろのほろまに
うねろまきふとみたはくー うね みとろの月

空しくみえみえみえみえ

●ふくみ 中 ぬきふくみ ぬきふくみ
ふくみふくみ ぬきふくみ 袖ふくみ 涙ふくみ

●泡　あゝ泡　浪乃泡　まゝ消る泡　あゝ白泡
夕わむようようわん　うたふ　泡

浪ハ。このゆゆ沖津凡 津とて浦
丁の終末の末 徳細代 福とて泊舟
白や 尾む 乃おとす 翁志 花の罐 池川 海
つらぬのふしにささる 自妙の浪とて思ふは終つた
な模 乃とてささる 乃河川 浪のふしにささる 乃ささる
乃古 乃の終末のふしにささる 乃入目とてささる 乃沖津の浪 乃
乃の終末のふしにささる 乃入目とてささる 乃沖津の浪 乃
乃の終末のふしにささる 乃入目とてささる 乃沖津の浪 乃
乃の終末のふしにささる 乃入目とてささる 乃沖津の浪 乃

[illegible]

[illegible]

うしろくろくめをばくの巻みだり

高士

おき
えきふ城の井のぬききき
大南

大埠

麻のきくやふれの中とくくくくく

柳

天竺(印度)の
佛(ブツ)の
家(カ)を
三(さん)つと
めたる
君(キミ)が
ふたなりて
さう

卷

乙下の所へも来る所をといふなりと云ふ

夜坐

門外漢の言ひ

之

海士 海士 海士 海士 海士

水乃舟
 水為屋
 水為衣
 水為食

かづきの海上　○浪の現きき　入に舟　志気あ

天の師凡雨々浦々心渡安れ佳言難波

[illegible]

五 原場より四月の夜、豊後守と豊後守の松と、山をかり、松田

付。朝。夕。海。

川 族 𪛗 𪛘 河 原 川 𪛙 𪛚 川 音 𪛛 𪛜

川
江
都
河
支
所
室
中
所
川
橋

川浪川鳴

新 岩側 洞のやう 洞のうへ 洞

そこより 洞 ありく 洞のうへ 洞

洞 洞のうへ 洞のうへ 洞のうへ 洞

洞 洞のうへ 洞のうへ 洞のうへ 洞

洞 洞のうへ 洞のうへ 洞のうへ 洞

洞 洞のうへ 洞のうへ 洞のうへ 洞

洞 洞のうへ 洞のうへ 洞のうへ 洞

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

○岩根 少 甚 是 市 なるや 庭 花 浪
 望 砌 柳 松 なる 弘 弘 慍 慍 重 なる
 出 田 十二 足 野 月 なる 王 なる
 松 なる 舟 なる 春 なる

傳説
 三國志のつぎに人朝まに物とて旅なほり多人
 とは事なるのうに伊勢物語は何石の左太右
 人言條にりし柳と廣くあらゆ地ととくあ
 るとみちのれ地寛とつとみとる地寛と
 せしまらるる地とつとみとる地と

ももきりに油とともおろく二匹の船をうへ
かぢのうゑをちりちりして舞うとあそむ
まむしなり

[illegible]

田蛙 田鰍 沙 細き流 水 鳴 小 糸

つゝ 国入古平 ○柳川より 浪の如く
青月雨の浪 岩根鴨 驚く如く

大奥のうらな事をききうけて斗きこゝろに上りし神事

一殿 ^主 二の殿 友作 五の目 友友 高殿

ほきぬ 友友 滝友 滝のうらまの 約友

○あし軒とく 五上 町入り 花 庭の池 池邊

もけの戸 けり袖 手れ 出入り 主膳 作く 華

あし けり けり けり けり けり けり けり けり けり

^三 二樓の 樓の上 高橋 ○屋 味しき月 水の如

集の 音 落れ 砂 浪 少の 雲 とも 遠の 燈 火

り けり 舟 南入り けり けり けり

於て 見か

ろく 上の けり けり けり けり けり けり けり けり けり

^三 一宿 付家 二の宿 よき 一の宿 浅茅生の宿 住宿

津の宿 宿の 庭 宿入 主 荒く 宿 宿の 板 石

宿り けり けり けり けり けり けり けり けり けり

●家 妹の家 家 居 小家 是く 家 けり

三 庵に入るもの丸^{イロ}のわきまなりやまにふりかへ月夜に

氣^{イロ}なる人物がやうに入つて棚下^{イロ}じきむけく 去旅

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 浦^{イロ}の人^{イロ}とて

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 稲葉寺 難波

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 難波^{イロ}の人^{イロ}とて

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 山下^{イロ}の人^{イロ}とて

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 草^{イロ}の人^{イロ}とて

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 小田^{イロ}の人^{イロ}とて

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 松^{イロ}の人^{イロ}とて

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 山^{イロ}の人^{イロ}とて

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 中^{イロ}の人^{イロ}とて

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 世^{イロ}の人^{イロ}とて

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 雨^{イロ}の中^{イロ}に

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 草^{イロ}の中^{イロ}に

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 月^{イロ}の中^{イロ}に

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 軒^{イロ}の中^{イロ}に

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 雨^{イロ}の中^{イロ}に

三 庵に入るもの付き^{イロ}なるやうに 梅^{イロ}の中^{イロ}に

障ろ ありてす 馬の毛

世々も人々もあつた倉山わくの松さきまへへき家

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

竹のあり 朝戸 柴のあり 松のあり 草のあり

図のあり 各のあり 岩倉戸 村戸 あつた青い

・麻 柴のあり 松のあり 草のあり 用く麻

さ麻 ところ麻 麻うじむる まく麻

戸に麻のあり 色麻 月を袖にひく麻

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

主 一戸 甘麻 模つた松戸 店 柴のあり

一忘松の志、松生之志、
 冬心南窓の夢む月と待雪いふ
 松の下流を知、水の玄、霜久、涼朝日
 花の名、高橋タカハシ
 忘梅水面、雪封寒

露重窓空綠竹但

一床 上 中へたうニ 朝床 床の上 ひろき床 床
 小床 度々 床 床 床 床 床 床

契床申久床〇〇之松
心より保

物のさびしう 物さへ 伏猪 福雄子

月 歸 門 琴 目 是 我 聲 網 代

山残のすゝ風の下きてみもみたりとてを流る上東つば

一里
山
右
中
右
里
合
之
乙
義

里又有一村一里一野只里人

たき里をへり
溪のほとり
師士の住里

弁山の里
 の里
 山陰
 の里
 山本
 の里

五里入里

○塩はの梅 呉作 紫の烟 笑 行く田
焼火 淋しき松 凡 木葉 鐘の音 朝市
水の多 青 道の性 来 思 衣 持 古 野

三輪生田春日布衣

よに余

古
いさゝか風よる美人をうや伏人の里の道に
いさゝか

夫
佐川の入り客の松より来る小冊すくじ里へ家
一匹 土居小次郎袖入迄 紫の袖迄 竹わづ。迄

一區

玉照

小

恒
袖

八經

柴の

袖

竹

12

一、松垣入垣竹の垣芦の中垣と丸垣称

垣个爰乃才垣わ垣

善世中

霜个

臨門よき所よきによき臨よき妹よきによき臨よき所よきによき臨よき根よきによき臨よき

江戸の金貨

○植五花 菊の庭はうう 榊檉 蜀葵

長行 黄代多 小田の店 家居宿 里のまゝ

施—通曉 方の色 よんいろ

神のふた葉

我々の難の菊はむのまを五まゝに六ハアを月之四々

文
 新六
 平三
 一箇
 約
 まく
 約
 鞠
 琴
 小車
 奥
 信実

文
 素より色りぬき竹を秋のふくくるやとて人々養
 素よりよき屋を一世の流すまやかそまたむめいといへば
 初六
 くうしそあさつちいのたうもすしおとなきぬめい信実
 四三
 一箇　玉屑　ともを給いはる　約庵のむら若宿
 約庵のすきうちり　約庵の池凡　約庵の袖口

わがまゝに居て一世の終をまやふまふむのハも恒ふ

信実

卷之五

[illegible]

まゝと入る也。○みち宿 奥廊に国

車の内ちなり

伊勢物語

雪村先生

新刊

はる男とあるは、むすむかふとつゝ入るこゝで、甚平

年

久々の逢ふはすれど
あはれでな
光俊

一平

一付切

[illegible]

車 玉の砌 雲の庭

何處之菊の庭
吾人の花
望松柳

菊
秋
宿
色
池
乃
真
砂
鞠
多
盛
胡
紫

寺
初
霜
九重
眉
居の袖
出入る

新古のちふらつとて出づとてねたりと人やうん山
紫人のまんもまてむまかふらつとてうんかたを極
五月雨のまじくきこひなをうこの敷きりて
一介面 二目のやめ 卯酉の雲

○砌 花のりり 鳴り うら 宿 虫の志

秋 落 梅 柳 竹

凡 山雲憐人の声秋のりて卯酉の相のよき家
五月雨のまじくきこひなをうこの敷きりて

植物 生類

一 松 松原村松ら松娘松松の村立一松

山松うま松山岩根の松松のり根松のよき

松のり末松のあま松のり松のり解松のり松

松のり松のり松のり松のり松のり松のり松のり

○松のり松のり松のり松のり松のり松のり松のり

松のり松のり松のり松のり松のり松のり松のり

山類居所木 小倉山住吉高砂唐橋みり

模へ古本 松のそけい山 松むく

○奥山 寺 村 飯 飯 松へ夕 松村 松木

古寺 飯丸のわ 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

松へ夕 松村のま 飯地 花 松へ夕 松村のま 飯地 花

風霜何雨草川 林飢月くる紫人

斤岡生田三草山いそを

と人

古
太ももは森の下草おどろき馬ゆきふく

ま
穴のまゝ錦と織くへて新田の森神さむり 信明

一草 小草村 まるふ草 まきまか 八草

一草 草のや生 まきまか 木の下草 村ま

谷の草 草のけ 草の原 草かくれ

草枯田まわらま草はま草 三馬草

まき まき まき 野 卯田原

古
赤ま 木の下 岡 古松 岡

古
春風くまき まき まき まきのく 木下 君と

古
まき まきのけり まき まきのけり まき まき

まき まきのけり まきのけり まきのけり まき

まき まきのけり まきのけり まきのけり まき

山石根 草 草 古寺のり 木 木

花の折木 木のま いんり 谷の戸 古家

外れに門田のふちもまき其のぬちをねんて信信
十三 いそぎあきうらなりの定らときり杣 ふときうま
一 いそぎあきうらなりの定らときり杣

まきの色 あまの こけきききき ふときうま

ふときう ハハ 独住 あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの あまの

水
三津志はる衣心まはる大ねねまはる
魚腰

公を存せしめんと欲す。腫れ傳ふ友も亦其

甲物

申物
空をわく春衣に福をまじりて袖とて

農業要のき

良業雪のき
けしけり女もくひきまをきき
が

いふ人玉の毒と八まねく人者二人と終め

残のち印の藤より果ていつく冬をぬけぬ

人々を導くことを見る所あり

年物

一、
漢書
省の定
漢書
漢書
漢書

雪山乃溪茅

○ 葦子里 康 嘉 納 川 古 塚 稻 妻

霜
衡
出
青
羅
小
野
矢
田
野
什
品

揚衣 俗の量 笛の音なるまじくぞ

中ノ川の著人をもつて之を屏風の月

[illegible]

公卿大夫士各執其職以事其君

一竹 川竹 号竹 村竹 谷の号竹 ぶや竹
 りんの竹 竹の源根 竹の根さー 竹のさ枝
 竹のさ山 竹の畑 ぶひく竹 竹のさ竹 竹のさ竹
 竹のさ竹 竹の林 竹の下竹 竹のさ竹 竹のさ竹
 ○川内川 竹の里 堤田 竹のさ竹 竹のさ竹
 竹の畑 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹
 忘れし 初 菰 糧 着 伏の里 源草 山
 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹

竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹
 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹
 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹 竹のさ竹

中殿 灯 残 音

一教 やつ かん 教 教 教 教 教 教 教 教 教 教
 一教 やつ かん 教 教 教 教 教 教 教 教 教 教

○里 村 草 の 菴 竹 住 家 菴 か や り 欠 物
 の や り 菴 か や り 欠 物

小 院 々 陵 教 大 臣 々 朝 市

傍 真砂池 厂 營 以 飯浦 山 寮 仙人

古き都 住吉 和 赤浦 入 江 目 目 目

于 江 河 洲 例 俗 氏 松 河 赤 入 河 田 義 義 給

と 浦 堤 下 遠 なる 河 乃 独 々 なる 俗 氏 入 江

田 義 義 給 なる 俗 氏 入 江 乃 田 義 義 給 なる 俗 氏 入 江

碧 落 無 心 猶 猶 猶 猶

才 三 才 四 法 今 夕 夜 猶 憶 子 竜 中 俗 氏

才 三 才 四 法 今 夕 夜 猶 憶 子 竜 中 俗 氏

邪 波 乃 淫 乃 淫 乃 淫 乃 淫 乃 淫 乃 淫 乃 淫

一 移 乃 移 乃 移 乃 移 乃 移 乃 移 乃 移

月 夜 移 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

狩 場 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

〇 神 社 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

真 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

目 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

唐

一
上
下
中
左
右
前
後
東
西
南
北

三つ声は福 福は秋 福は秋の物なり
 福とらんともいふ合く福のまゝとてう事
 又まじの麻まのいと人をらんともいふま
 車とちらんともいふそ

○山王古烟松 中 山平 合 日 氏

池の立木 村芝 罌 木涼き山 竹の林 古宮

[illegible][illegible]

此は佳作
 書の上は
 妙なる
 筆墨の
 妙なり

竹多 竹多乃下道 竹多ひきき 芦のふつふ

くろの浮粟 ときどき ありふれたもの

○入江芦原多真砂池浪舟舍碇

芦屋のあ
 玉と
 沖中川
 古沼
 池は具う

くさくさのこころ
拙み

好むより進みなりけり
 今わが家原より

入和

あなをのうへにの杜の人をのきぬとて後れ

一語 酔わう 仲の酔 酔わう 酔じよのて

い 伊凡 仲津舟 浦浪 ぬ江の濁 いり

芦 魚 汀の雪 見ぬの池 羽神

羽古 酔わうぬの浦の仲津舟の夜舟のよ月夜やけこ

浪のうへ消ぬもがたふつふむきそくろ酔より後成

一集 千五 糸の声 糸の夢 の林 淋し心 山里

山陰 ちん 酔わう ねえん ちんちんちんちん

蓬集の巻よりうねりてうねりてうねりて

うねりてうねりてうねりてうねりてうねりて

うねりてうねりてうねりてうねりてうねりて

一集 千五 仲の酔 酔わう 酔わう 酔わう 酔わう

うねりてうねりてうねりてうねりてうねりて

うねりてうねりてうねりてうねりてうねりて

小家宿里園を起する 諸君とてま

相坂 立田柳 神垣 夢をうさきぬく

一牛 野うしの牛 やき牛 牛の子 小牛
牛の車 此の牛 あく牛 〇里へ用をも
四人のあまをわがまき 用中を 耳次山の
ゆきの物ぬの中ををまきく程のたつぬ也 衣
耳あふふをきく山門をすきく人き 衣
一猪 斗ぬ豚 かきくくを我 あむ衣ぬいりぬ
〇さや 谷の戸 篠り 衣 山をぬ 衣
養 衣 衣 衣 衣

一虎 虎の尾 虎の尾 虎の尾 虎の尾 虎の尾
一虎 虎の尾 虎の尾 虎の尾 虎の尾 虎の尾
一虎 虎の尾 虎の尾 虎の尾 虎の尾 虎の尾

一熊 熊の尾 熊の尾 熊の尾 熊の尾 熊の尾
一熊 熊の尾 熊の尾 熊の尾 熊の尾 熊の尾
一熊 熊の尾 熊の尾 熊の尾 熊の尾 熊の尾

○奥山 山を指す也 本を成す奥山不食

古木のうへま 少くも

白雲のうへま 山を指す也 山を成す奥山不食

日 今まを成す奥山不食 山を成す奥山不食

一孤 きのうの外とを孤 古孤 小孤

屋孤 孤蔵 蘭菊 叢

○古塚 多村 古社 山陰 蓬生宿

蓬生の巻 蓬生の巻 蓬生の巻

一鬼 鬼の巻 鬼の巻 鬼の巻

一鬼 鬼の巻 鬼の巻 鬼の巻

一鬼 鬼の巻 鬼の巻 鬼の巻

一鬼 鬼の巻 鬼の巻 鬼の巻

一鬼 鬼の巻 鬼の巻 鬼の巻

一鬼 鬼の巻 鬼の巻 鬼の巻

一鬼 鬼の巻 鬼の巻 鬼の巻

一鬼 鬼の巻 鬼の巻 鬼の巻

是拍本堂我のあ

真意慮下るむあうくわくはたきまうりきく妹さく思
 手九
 一様 猿けし一様乃の衣襟とる猿 まら
 木のこ猿の深山 本流さくし家への麓 岩
 月山毛 満し急本流 夜る月と深山を境
 毎夜 移るまぬ葉の戸 山里 本流の河内 材
 紫栗 深山 何さ
 材栗斜 踏波猿声
 何さくまらあふるまらむわくくさくや大あは

[illegible]

一^聖歎
うける歎
歎のこゝかふもまの

つ奥山 谷乃乃 此き藤原 草村 秀乃戸

嘉善山烟岩根石

一^甲條蟹 けいふのまきりお宿 すぐけいふ
けいふのまきりお宿 すぐけいふ

○小家の軒　　せし侍々　村作　　清芳生

唐土のふすむ

侍合もあり又候事なり

東平府
東平府志

一頁付貝の子佳奥 薩佳奥のくま奥 鱗

貝拾人
貞子
貞子
貞子
貞子

日所不遠地以爲公薛玉原

[illegible]

一六 透之痕字 沙山 記

住浦
二見の浦
伊勢の海

宇治川の底を流るゝ水を河と稱せしむるを
白き真水と稱せしむるを代を流るゝとせしむるを

十
 わらぬきとともみ代成を思ひつゝ
 声なきまのしをよめるあふえり
 仲集
 天のくし押ゆるいさかきし神代月の新を
 一星天津彦星入光星のけわる星は望月
 友友の
 夕々太田里のしほ星の林星の位
 〇々曉をる夕あや芳る本ある
 米世路を忘る所菊も晴五月取
 さとりまに曉未更別れ神系焼る

市
久々おれの上よりうき天晴星なりとまきおれけり勢
知
お河の川にはまきおる星とまきおれけり其後
伊勢物語
とくく夜に星をみよとまきおれけり其後

三月廿二日
小幡左衛門尉大藏少輔
大藏少輔

[illegible]

明日 明方 明方 明渡 明思 明国
わさく 初高 月ヶ 高 敷情 舟出 して

泊舟仍人怪心をも 拙詠を先

^男夜とすう

首をみづくをうらはせぬ

^馬術

六

一雨 あつちのよこぎるぬくのぬ 朝のぬ

ぬ夜ぬ ぬの三月のぬ 忘打ぬぬをき

村ぬぬ言ぬくきしぬぬ ぬちきし雨

○ゆきし月くきしぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ゆきし凡族の中若子奴落候姓重

舟のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

唐より龍 けりく ぬぬぬ 河のまぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

起とぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

やうぬの朝日ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

大庵山ぬぬぬぬぬぬ中

柴乃木のくちとみよこまはほやち風をさくら肥は
 山嶺目よりわらわちその八きく山事ややみん日
 山は遠雲埋行客跡よりあこゝ旅人のまじ
 竹班湘浦雲凝鼓瑟之路
 一烟 明したく夕煙 萬煙 焚火の旅 里の煙
 煙々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 ねんねん 川の煙 風の煙 まの煙
 ○煙 煙のまの煙 まの煙 小家 海士の住家

民の^ノまき^ノたけの^ノ湯^ノ入^ノ上^ノ松^ノ谷^ノ川^ノ
柳^ノ胸^ノの^ノまき^ノむ^ノ富^ノ上^ノ候^ノ方^ノ室^ノの^ノ公^ノ爲^ノ炭^ノ竈^ノ
梅^ノ枝^ノ里^ノの^ノ心^ノを^ノあ^ノく^ノし^ノ里^ノの^ノまき^ノく^ノ共^ノ所^ノ

信候より候方の書より立寄る由人のやうなりぬ其平
 凡もむくの松のやうな書とてぬれとてぬれとてぬれ
 今も人々の為なる家とてぬれ悉の御代よりぬれとてぬれ
 柳とてぬれ入酒中とてぬれ柳竹とてぬれぬれぬれ

枯野 小野 草野 末の野 野より 遠の野

○草 莖 野 人 虫 清 水 沃 水 符 湯 旁

布衣小倉里 春日里 嗟嗟 三三

ま
なまのうゑのいへんを月影の下に置く
まね

一市イチ朝市 市人 とう市 市のしや 市の場

五市 市女。○舉人。新里。砂海。賀々人。乃乃。

舟車 三輪 飯イロ 住吉安部イロ

大隱と朝市

定家

山付石

山石
山石
山石
山石
山石

岩多
常山
岩抗
岩傳

卷八

●石の石 石の石 石の石

いへば松苗 穴井一 材地の紅葉

古寺の松 梅子 清の池 滝川 鶴谷の

磯へ 昔 旅のつ 吉野山 吉野山 戸を

君代々 天の羽衣 まま みる みる みる みる みる みる

天の河 川の石の石 みる みる みる みる みる みる

一真砂 土砂の上 真砂の道 流るる

○とりわく 戸 芦 鶴 松 原 表 芦 の 石 流

とくが 袖 庭 砌 神 の 街 土 地 土 地

みる 川 石 土 地 土 地 土 地 土 地 土 地 土 地

一柴 付 薪 小 木 ま 木 木 山 柴 お 木 柴 下 柴

土 柴 人 柴 の 枝 橘 柴 推 柴 柴 舟 柴 車

柴 つ 車 ○ 山 路 伝 伝 山 里 材 木 木 木 木

木 木 木 渡 舟 市 の 場 宇 治 の 河 舟 小 舟 木

● 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪 薪

柴

洗衣

江戸の印江守治 玉川里河崎の里

水邊草

武蔵

調布とくひなわらふをきくぬきとてぬき川の里定家

三三

一洗衣 ぬきわらふぬきぬき〇雨とてぬき帰る人

まじ侍 ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

やとり住 いぬぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

築山とてぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

も八伊とぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

男のぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一麻衣 麻の衣 麻の衣 本首の麻きぬ

〇賊のと 稲と守袖 笹と 他人袖と 野と

ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

一衣の衣 付たの袖 ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

麻衣

誰の衣浦分衣袖きんきうけ衣古衣
う奇衣捨衣きんきう衣恒きんきう衣炭きんきう衣
恒きんきう衣ま遠の衣為衣心の刀衣恒を
きんきう衣きんきう衣みのきんきう衣きんきう衣
●花の袖きの袖袖きのきんきう袖紫の袖
きんきう袖きんきう袖きんきう袖
きんきう袖きんきう袖きんきう袖
きんきう袖きんきう袖きんきう袖
きんきう袖きんきう袖きんきう袖

焼火

此持重作きんきう袖きんきう袖
きんきう人小車袖の焼焼物のきんきう袖
●きんきう袖きんきう袖きんきう袖
下外きんきう袖きんきう袖きんきう袖
一焼火きんきう袖きんきう袖きんきう袖
きんきう袖きんきう袖きんきう袖
胸の焼火のきんきう袖きんきう袖
以恒守浦舟きんきう袖きんきう袖

主
魚火 魚分 魚入 魚焼 魚煮て

○神楽の場　月曜に夜持舟　西の池より
佐田守　宿直人　是　習ふ八琴　綱代寺　舟母
つるまよとそふ意の船もそむき終をぬかすなり
乙八源氏の四子と玉君は琴をなぐ　うさしめ廻
きとして無火の狭いむくひめしてものなり
よともてやまきりて終琴と出たてて海よりぞ
和来なきやふのちては無火の便なる船とあり　玉葛

灯　るの灯　るの灯　志の灯　灯とつく夜

入

たの行

玉の所

灯

夜

かゝる所 法の所 まゝくかゝる所
かゝる所 法の所 まゝくかゝる所
かゝる所 法の所 まゝくかゝる所

佐の所

五

李之

灯

物の所 もののところ 壁の所 かべのところ 壁の所 かべのところ 壁の所 かべのところ
 えのきとすまゐ えのきとすまゐ 玉の所 たまのところ 玉の所 たまのところ 玉の所 たまのところ

月昇
懷玉乃斯

壁子

行

地の系

○古寺 神祇法行 とのふまの久 仲典
今侍終や 月侍程 蚤さ百合心 ひくく乳ま
うづ 侍麻の子 友虫 明石の神 天の橋を

月侍禪

行との
資と
出の

下
見
の

人約典

倭酒_ヲ買_フ外_ニ重_テ用_ク宴_ヲ

重

用宴

文のねえちうく2月の中五日のきし

三月

の中

くさく

丁

香

独りふけきりハ海老の住くこゝをみるかゆ
 是ハ案の上の川あり源氏源氏人左馬の川時川は
 まくのわたりは源氏の浦川の幸三と繪よりを
 うつ都人の川ありあつては川表をみるわたりを
 ありは付源氏のわたりは川表と繪よりを
 まくのわたりは源氏の浦川の幸三と繪よりを
 うつ都人の川ありあつては川表をみるわたりを
 ありは付源氏のわたりは川表と繪よりを

○まの 穀まゝの 琴と 讀うと 物
乃け 小野の 奥

是よりいふ所の君の心ありて舟の君宇をまぐ
 ちと捨つるにまよふまよふとてまぐちの平を待た
 のころのふりて捨つるに横川の僧都伯也
 ちと捨つるにまよふまよふとてまぐちの平を待た
 びうと物のまよひの僧を僧坊加持ありておんまご
 びうとまごひの小野をておんまごひのまごひのまごひ
 一屏凡 二屏凡 三屏凡 四屏凡 五屏凡 六屏凡 七屏凡 八屏凡 九屏凡 十屏凡

此處 ぬきむ ましてさる年 いふはたふらふに
何ともいふべし
一方は ぬきむ さる年 飛く年

さる年つゝ 遠なる年 おいふ年

○ 乃て 丹路 浦の 菅を いふと 菅 世に せ

井 茨 心く 心く 心く 心く 心く 心く

心く 心く 心く 心く 心く 心く

一 其 名 引 基 名 ある 基 名 いふ 引 基 名

○ 龍 心く 心く 心く 心く 心く 心く

所 中 川 宿 基 名 ある 基 名 ある 基 名

よの 心く 心く 心く 心く 心く 心く

心く 心く 心く 心く 心く 心く

心く 心く 心く 心く 心く 心く

心く 心く 心く 心く 心く 心く

心く 心く 心く 心く 心く 心く

心く 心く 心く 心く 心く 心く

井 乃 心く 心く 心く 心く 心く 心く

セタの邊 四町ノ邊 玄奘とあそぶ 石炭の
まゝより 住吉の神を祈る 人を侍用

一 舞人衆 舞立 舞袖 舞の足
 乙 女子入舞 舞のうや 舞の袖 舞の
 〇 琴 笛の声 神手 百あめの心みこ
 の下 花のさくら 舞のうけ かぐーのむ
 月の如く 夜 夜 夜 神 神 神
 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天
 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天

物 物 物 物 物 物 物 物 物 物
 乙 女子入舞 舞のうや 舞の袖 舞の
 〇 琴 笛の声 神手 百あめの心みこ
 の下 花のさくら 舞のうけ かぐーのむ
 月の如く 夜 夜 夜 神 神 神
 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天
 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天

茅もさきの穴のむちをさすのまのまにけり 師教

秋萩のむの下のり白露の錦さける むのそら

みづを八柳極とこまをそくおとさあゆむ さき

あめをよりうの錦成る ま やふれに集

一仙人 幸 仙の住家 仙の宿の菊のあゆみ の

礼基 幸 山人の薪 瓜本 食戸 竹の根

何と成 砂の門 幸 桃さる谷

さのち袖 幸 小菊のさくらとふき 無名 後 悠

師教

さのち 幸 袖 幸 小菊のさくらとふき 無名 後 悠

うら 幸 の 役 幸 せり 幸 うの 役 幸 国 幸 なる 幸 うの

○ 野路 馬の上 幸 流る国 柳枕 砂河 後 悠

一唐 幸 とも 幸 人 幸 唐 幸 舟 幸 唐 幸 の 幸 又 幸 唐 幸 人 幸 なる 幸 の 幸 又

う 幸 国 幸 なる 幸 う 幸 こまはくうの くさくさ 百洲国 の 大の舟 は

知 幸 佛 幸 ね 幸 浦 幸 写 幸 ま 幸 ゐ 幸 の 幸 又 幸 錦 幸 傳 幸 り 幸 琴 幸 の 幸 音 幸 さ の と

香 幸 る 幸 かり 幸 じ 幸 こ 幸 と 幸 ち 幸 ね 幸 ち 幸 秋 幸 の 幸 孫 幸 ち 幸 ゐ 幸 なる 幸 け 幸 大 威 三

い 幸 月 幸 寺 幸 袖 幸 なる 幸 孫 幸 の 幸 さ 幸 ゐ 幸 かり 幸 じ 幸 舟 幸 の 幸 じ 幸 け 幸 大 威 三

一都 付九重 古き都 古き都 都の門 都の

都の面 古き都 都の門 都の門 都の門

●九重の門 九重の門 九重の門 九重の門 九重の門

都の門 古き都 都の門 都の門 都の門

都住 百歳 都の門 都の門 都の門 都の門

都の門 都の門 都の門 都の門 都の門

都の門 都の門 都の門 都の門 都の門

小車 月とみえと 侍りも 都の門 都の門

都の門 都の門 都の門 都の門 都の門

都の門 都の門 都の門 都の門 都の門

奈良 都の門 都の門 都の門 都の門

都の門 都の門 都の門 都の門 都の門

都の門 都の門 都の門 都の門 都の門

都の門 都の門 都の門 都の門 都の門

都の門 都の門 都の門 都の門 都の門

都の門 都の門 都の門 都の門 都の門

○後夜宿 花入庭 賭う 々々

酒の序 糸竹の声 庭の清う 連う

門の朝清め いこり内

一酒 酌酒 かくす盃 盃の序 盃足

さけくじ 未酌 破の中 破の乳 まるう

○笑 糸竹の声 祝え 作詩 讀ふ 神奈

神天 鞠の切 いとち 出 閑遠 閑遠 舞人

菊の宿 月花の縁 紅葉う げん 声 市 吹

年 越る 妻を せの 長會 今 ねめ 折ま

住 吉の市 せの 人

一曲 紅消 糸竹 舞う 舞 舞 舞 舞

糸竹 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う

舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う

舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う

● 酔 糸竹 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う 舞う

むの法にまづ 衣の玉法を傳へて

赤松

衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

一家の凡 一家の凡 一家の凡 一家の凡 一家の凡

○まむの法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

音 笛の音

金 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

一 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

一 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

一 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて 衣の玉法を傳へて

賀 江戸の賀のものが大月の賀のものが大
 今月の賀のものは大月の賀のものが大
 あか いあいの月 大月の賀のものが大
 祝言 大月の賀のものが大
 初子日 大月の賀のものが大
 今長き人 大月の賀のものが大
 延寶七巳未年孟夏吉日
 野田藤八板行

平安書林摘枝堂藏板目錄

二條通富路大町

野田藤八

古語拾遺言餘抄

五冊

用藥須知

松田玄達著

三冊

神武卷集解

二冊

同後編

右同

四冊

本朝續紹運錄

一冊

同續編

右同

三冊

前王廟陵記

二冊

廣參品

右同

一冊

同増補

二冊

怡顏齋小品

右同

二冊

諸家大系圖

十四冊

食療正要

右同

四冊

本朝紹運錄

一冊

笑話出思錄

後野東甫著

一冊

正續疑孟 司馬溫公

一冊

陶淵明全書

昭明太子撰

四冊

為學正論

長門蕭訂編集

二冊

訓幻字義

東涯先生著

八冊

古訓輯要

右同

三冊

孝經頭書

彩板

一冊

名義集覽

右同

四冊

語錄字義

一冊

量地指南

村井昌弘著
西見及弘

三冊

管家文草

十二冊

滕王閣

歐陽詢石刻

一冊

秋風錄

但來答門書
多野東市著

三冊

雲塵毛將軍

李邕石刻

一冊

万病回春發揮

四冊

海燕帖

董其昌石刻

一冊

日用食性

平多

一冊

京繪圖

懷中一技摺

一冊

京雜談集

沈嘉祿著

三冊

同道法付

彩毫

一冊

勸善樓煥傳

五冊

同增補新板

右同

一冊

風俗詠人

孫入

五冊

雜草錦鱗素

家流

一冊

豐慶錄

孫入

五冊

万世用又書

玉皇流

一冊

和分付合

少平

一冊

續本長和川

二冊

日名所出

少平

一冊

日世書

三冊

日竹園抄

為廣之他

一冊

日世書

三冊

日世書

為廣之他

一冊

萬葉百人首

小冊 一冊

五古文庫

仙傳集 二冊

女文要神觀

中冊 一冊

仙傳集續編

中冊 一冊

秘傳書袋

皇極書袋 三冊

仙傳集續編

中冊 一冊

一目千軒

小冊 一冊

風流勅進紙

後入 五冊

茶人形氣

後入 五冊

向不見園の跡

日 五冊

鎌倉諸藝袖日記

日 五冊

俄仙人戲言日記

日 五冊

江戸紫芳吟

日 五冊

怪口約さる人

日 五冊

筆道如意珠

一冊

職人歌合

三冊

梅花掌中指南

五冊

伊勢拾穂抄

二冊

同 新版

五冊

三部書增註

盤香著 十冊

古易三家言

新井白蛾著 小刺 一冊

百人一首增註

四冊

同 補

同

一冊

堀川松書合

三冊

易術便蒙

片岡如圭著 小刺 一冊

函府少書全集

五冊

易詁

同

一冊

切字指南

二冊

四書

正佐點

十冊

言塵集 今川了俊著

七冊

古文後集

同

四冊

連歌雨夜記 宗長著

一冊

三因方陳玄無若著 十二冊

寺澤唱卷佳

新語園了意著 十冊

同 如厚性司

量地指南增補附錄 三冊

同 如厚性司

同 不求

第一冊



911.3

7⁴⁹